

今村 与志雄 著

理智と情感

中国近代知識人の軌跡

竹内好氏によると、魯迅研究の

第一代は増田渉氏、第二代は竹内氏で、第三代が著者・今村与志雄氏だといふ。本書は、そのような著者が主に原著「魯迅と伝統」(一九六七年、勁草書房)以後に執筆した評論を集めたものであり、近代中国の文学と思想の領域に造詣(そつげい)深い著者が、中国知識人の精神の生い立ちと結実の軌跡を同時代史的な問題意識において、それぞれの知性の「文学的肖像」を描くという方法でまとめあげている。

全体は三部から成り、Iは主に

著者の得意とする魯迅論である

が、魯迅の幼年期にもふれた書誌的記述だといえよう。IIは、著者が清の考証学者・俞理初(ゆり

についての小説である。

「このように本書は、きわめて刺激的かつ知的な冒険心をそそられる内容に充ちている。そうしたな

興味深い文学的肖像

「王国維小説」であろう。

IIの評論は、一九二七年六月と

いう中国革命史のもっとも劇的な旋回期に頤和園(いわえん)の昆明湖に身を投じた王国維の死の謎(なぞ)を統(めく)る所説を検証しつつ、当時の変動期にあっ

点では、胡風批判や丁玲批判の時

には摘発者・周揚の側に立ち、周揚が批判されるとそれに追従、さらに三〇年代の国防文学論争での劉少奇の立場を文革の論理で批判するといふ、わが国の多くの現代

中国文学者とほぼ同じである立場と著者は交わらないように思ふ。

著者は前者で、国防文学論争での陳伯達の立場を文革を方向づけるものとして高く評価していただけに、陳伯達が「反党・反革命分子」だとされて失脚した今日、私

しよ)を論じた長編、清末の註日外交官で詩人としても知られる黄遵憲(こうじゅんけん)の「日本国志」についての評論、宋教仁(そうけうじん)の「日本

Iト、王国維論、聞一多論から成り、本書の中心部分を構成している。IIは郭沫若、陶行知、許広平

かで、魯迅論のやや平板な叙述、最近、黄遵憲をテーマに米ハーバード大学で博士論文をまとめた日

本の若き学究の研究に比較したとき、著者の黄遵憲論のやや通俗的かつ単調な記述にくらべ、本書のなかの圧巻は、なんといつても

て、最後まで弁髪をやめなかった碩学(せきがく)・王国維が当面したであろう閉塞(へいそく)状況に迫っている。

私の専門領域からすれば、周揚の批判や文化大革命にふれた「許広平のこと」が注目されるが、この

(筑摩書房・一五〇〇円)

東京外語大学助教授 中嶋彌雄